

タイトル：2012 Middle Eastern and Islamic Studies in Japan: The State of the Art

日時：2012年12月1日（土）14:30～19:50

場所：Japan Center for Middle Eastern Studies, 2nd Floor, A2-1, Azariyeh Bldg, Beirut Central District

### From Ethic to Sharia-compliance: The Development of Islamic Tourism in MENA Region

安田 慎（京都大学イスラーム地域研究センター研究員）

本報告では、近年の中東におけるイスラミック・ツーリズムの発展を、概念をめぐる議論の変遷を追いながら明らかにするものであった。特に、イスラミック・ツーリズムが1990年代より議論なされてきたのにも関わらず、2000年代中盤まで実業家たちの支持を集めなかった理由と、「シャリーア・コンプライント・ホテル」にみられるホテル産業のみに議論が集中してきた背景に着目して、議論を展開してきた。

本報告では特に、中東で展開されてきたイスラームの理念・倫理の普及を重視する考えと、東南アジアにおけるムスリムに特化した市場を形成する考えの双方が議論されてきたことを示した。そのうえで2000年代中盤より、東南アジアを中心に国際会議やセミナーを開催していくなかで、両者の議論を同じ遡上に乗せ、イスラミック・ツーリズムのスタンダードを規定しようとする動きが出てきた。そのなかで両者の議論が融合していき、「シャリーア・コンプライアンス」という形で一定のコンセンサスを形成するに至った。このシャリーア・コンプライアンスに従って、2000年代中盤以降にホテル産業が一定の規定を策定し、それにともなって投資活動が活発になったことで、「シャリーア・コンプライント・ホテル」という形で実現してきたことを明らかにした。しかし、この動きは観光産業の他の分野では大きな広がりを見せることもなく、議論が続いていることも示した。

以上より、イスラミック・ツーリズムの発展は、理念・倫理と市場の双方を架橋する「シャリーア・コンプライアンス」というコンセンサスが関係者の間で共有され、一定のコンセンサスに基づいたスタンダードと市場構築が行われたことで、はじめて発展したことを結論として示した。

本報告に対して、レバノン大学のローラ・ハティーブ氏よりコメントを頂いた。全体の議論については概ね評価を頂いたうえで、コメントでは主に中東の観光を専門とする立場から、(1) 関連統計・データ資料の更なる収集と提示の必要性、(2) 9.11のイスラミック・ツーリズムの議論への影響、(3) 中東全体の観光とのなかでの位置づけ、(4) 観光研究からのさらなる議論とアプローチの必要性、について指摘を頂いた。その他にも会議の参加者から、プロモーションをめぐる問題や、東南アジアと中東との観光客の移動とイスラミック・ツーリズムの関係、イスラミック・ツーリズムの国際観光市場におけるシェアについて、多くの有益なコメントを頂いた。これらのコメントは、今後自身の研究を深化させるうえで、極めて貴重な機会になった。

会議全体を通して、シリア・レバノンの政治情勢を反映して、開催が危ぶまれた時期もあったが、無事に開催でき、発表者・参加者全員が安全に帰国できたことが何よりもの収穫であった。最後に、困難な現地の政治・社会情勢にも関わらず、本報告をバイルートで行う機会を設定して頂いた JaCMES、東京外国語大学中東イスラーム研究教育プロジェクトおよび関係者の皆様に、この場をお借りして改めて厚く御礼申し上げます。